

■『理性の防波堤が崩れる時…英里の再定義』体験版抜粋

ソファの熱気が頂点を極め、英里の胸板が荒い息に波打つ中、俺はゆっくりと体勢を変える。

彼女の細い脚を優しく広げ、スカートの裾を膝上まで捲り上げる。繊細な太腿の内側が露わになり、淡いレースのパンティが湿った輪郭を浮かべる。ブロンドヘアが乱れ落ち、深くぼみの二重瞼が潤んだ瞳で俺を追う。長い睫毛の先が震え、眉のくつきりしたアーチが不安の影を宿す。

俺の指がパンティの縁に滑り込み、入口の柔肉を探る。ぬるりとした蜜が指先に絡み、クチュクチュという微かな水音が響く。彼女の鼻先がピクリと動き、鼻孔が細かく開閉を繰り返す。低い喘ぎが漏れ出す。

「はあ……そこ、触らないで……まだ、心の準備が……」

俺の内面で、暗い歓喜が膨れ上がる。この狭窄の聖域を、じつくりと俺の意志で開花させる。高潔な肉体を指先から質量へ移行し、完璧さを内部から溶かす愉悦。彼女の抵抗を論理で碎き、物理で封じる――再構築の甘美なる序曲。

「準備？ 君の体はもう準備万端だよ。見て、この蜜。自然の反応さ。急がないよ、ゆっくり味わおう」

指を一本沈め、内部の襞を掻き回す。ギチツという狭い抵抗が心地よく、蜜の粘りが指を締め上げる。英里の瞼が重く閉じられ、睫毛が頬に涙を伝う。シャープな顎が天井を向き、首の細い筋が鋼鉄のごとく浮き出る。鼻の下に指が上がり、五指が視界を半分覆う癖――その震えが、侵入の予感を拒む壁となる。

「んっ……指、抜いて……これ以上は……理性が……！」

「理性？ それが君を縛ってるだけだ。体が求めているんだよ。ほら、もう一本」

二本目の指を加え、ゆっくり出し入れ。クチュクチュ、グチュという音がリズムを刻み、入口の肉芽を擦る。彼女の腰が無意識に揺れ、低い喘ぎが連続する。

「あんっ……く、熱い……やめ……んふう……」

鼻孔の縁が紅潮し、ツンと上向きの鼻先が汗で輝く。Eラインが微かな痙攣を起こし、

理性の崩れを告げる。指の動きを加速させ、蜜を掻き出しながら言葉を重ねる。

「感じてるね。この刺激が、君の内部を活性化する。僕の質量が入れば、もっと深く。信じて」

英里の指が鼻の下で固まり、指先の熱が自身の蜜の残り香を伝える。拒絶の癖が、快楽の現実を突きつけ、恥辱の渦を生む。肉体が指の侵入に慣れ、快楽の波が不快を押し流す乖離。

ようやく指を抜き、俺の質量を握る。脈打つ剛軀の頂を、彼女の入口に宛がう。スローモーションの侵入が始まる――。